授業報告Ⅳ

2009 年度冬学期　映像文化論　反省座談会記録

責任担当者：武村知子（言語社会研究科）

参加者（あいうえお順）

受講生：

一本麻衣（社会学部 4 年）

木村のはら（社会学部 4 年）

谷口公宣（社会学部 3 年）

津田美里（社会学部 4 年）

朴順花（言語社会研究科博士課程 2 年）

福島泰之（経済学部 3 年）

山口侑紀（社会学部 3 年）

渡邊弘喜（社会学部 4 年）

チューター：

長田祥一（言語社会研究科博士課程 3 年）

小松祐美（言語社会研究科博士課程 3 年）

原友昭（言語社会研究科博士課程 3 年）

司会・構成：

武村知子

少人数の修行成果

山口　やっぱり引越すの寂しいなー。クニタチになじんじゃって。

原　いつあちらへ？

山口　28 日の夜に飛んで、1 日の朝に着きます。

武村　ハイデルベルクでしたっけ。じゃ完成原稿は向こうで書くんですね。「原組」はそうするともう終わり？

原　いや、まだ、とりあえずもう 1 回やります、今度の金曜日に。

武村　まだやるの？　すごいね。「小松組」「長田組」は？

小松　あと 1 回あります。

長田　あります。

武村　あるんだ……（笑）。みなさんの頑張りにはほんとに頭が下がります。単位にもならず、全くのロハなのにね。こういう、講義とゼミをくっつけた授業の形は今後だんだん模索していく予定なんですけれども、私のは今年はほんとに実験的にやってみた感じで、つきあってくださったみなさんには心から感謝しています。「生徒」としての参加者が全部で 8 人？ 3 つの班

に分れてたので、全員集まるのは初めてですよね。一本さんどうでしたか、参加してみて。

一本　面白かったですすごく。チューターの小松さんがとっても優しくって――

武村　あ、そう？（笑）

小松　ゼミの人がきいたら驚く。ゼミでは厳しい発言ばかりなのに（笑）。

一本　ほんとに優しくてというか、丁寧に指導してくださったんです。それで、自分が書く書き方とは違う書き方があるんだなってわかって、それがすごくよかった。

武村　というと？

一本　最初、映像について「具体的に書く」ことに意味があるんだということを、しつこく説明してくださったんです。最初の３、４回はそんな感じで、ふうんって思って聴いてはいても、なかなか書くところまでいかなくって――例えばここでこういう人物が映って、ここでこういう音が鳴って、っていうことをいちいち書いて何になるのか、それで何ができるのかってことを最初のうちは全く理解できなかったんですけど、いちど原稿に詰ってしまったことがあって、そのときにすごく長いメールをいただいたんですよ。それを読んで、その時はもうそれに忠実に書くしかなかったので、仕方なくっていうと変だけど、言われた通りに書いてみたら、あ、何か違うものが書けたなっていう。

武村　どう違ったの？

一本　例えば、ここでこういうものが見えて、この音が鳴ってっていう細かいことを、書いてるときはただ書いてるだけだったのが、書いたものをあとで自分で読み返してみたら、あ、ここで自分が見てたものは「映像」だったんだな、ってわかった。そういう感覚があったんです。

武村　それはすごい。なかなかできない発見だと思いますよそれは。自分が見てたのが例えばアラスジとかメッセージとか印象とかじゃなくって「映像」と称される何かまるごとのものだとわかった、っていうことですよね、自分が書いてる中で。

一本　そうですね、だからきっと、読む人にもそういう新鮮な感じを上げられるんじゃないかなって。

小松　それは嬉しいですね、本当に。映像作品がいかに語りにくいかっていうこと自体が、もともとすごく伝わりにくいことで、私自身も何年も映像作品と向き合う中でやっとそういう認識を得たと思うんです。アラスジとかメッセージを語れば映像について語れるというわけではないっていうことが、そう気付いてしまえば意外なくらい、知られていないんですよね。武村ゼミでも映像モノについて書こうとしてる人がときどきいて、発表してもらってみんなで議論しているうちに、映像について語るとはどういうことなのかをその人自身がそのうち何となく体感していく、その過程を本ゼミだと２年間くらいで見ることになるんですけど、今回は３ヶ月というすごく短い期間しかなかった。でもその代わりほぼ１対１だったので、すごく円滑に話ができて。最初は一本さんも、映像作品、具体的にはテレビ番組だったんですけども、そういうのがいかに語りにくい対象なのかっていうことも、その語りにくさがどういうところにあるのかについても、たぶんあんまり認識を持ってなかった――

一本　そうですね。

小松　でもそれをすごい速さで理解してくれたんです。それはやっぱり差し向かいでできたからだと思うんですよ、コミュニケーションがとても円滑で。それで、その上で書いてくれる文章がまた、ものすごく面白かった。

武村　添付メールでそのつど回る原稿をずっと覗いてましたけども、どんどん書けていくのがわかったよね。

小松　私自身がびっくりするくらいの形で成果を感じられたんです。大学の学部っていうところでは普通、ゼミ発表といっても基本的にいわゆるレジュメ――要約の形で、箇条書きで要点を並べて口頭で要旨を説明するとかで、その要約に関して、そのように要約したのはどうなのかっていう点はあまり問われないですよね。つまり要約の形そのもの、そこに書いてあるテクストの形そのものを問われることがあまりない。まあ箇条書きなのでテクストと呼べるようなものではないんですけどね。でも、読んだものを要約するだけなら高校生でもやるわけで、大学では卒業論文っていうまとまった文章を書かなくてはならないにもかかわらず、対象について文章を書くときにどのような言葉遣いでどのように記述するべきなのかという部分は実はぜんぜん教わらないよなあ、ってことは自分の経験からも常々思っていることなんです。自分の書きたいことを論理的に書く技術をどうやって身につけるのか――きちんと勉強して先行研究をしっかり読んでいれば自然に書けるようになるということもあるかもしれないけれど……。大学では目次や参考文献の付け方とか章立ての仕方とか、そういう意味での文章の書き方、というよりは論文の形式は教えてもらえるかもしれないけれど、文章自体が論理的に書かれているかどうかっていうのは形式とは全く別の問題で、むしろどちらかというとそっちの方が重要なんじゃないかと思うんですが、それって教えてもらえる場がないんですよね。今回は、一本さんは卒論も書きつつだったんですけど、学部生がこういう形で、自分が対象とするものについてどのように書けば書きたいことを論理的に書くことができるのか、それを学ぶ機会があるのはきっとすごく重要だろうなと思いました。

武村　今回、生徒のみなさんの頑張りもすごかったけども、チューターのお三方の実力につくづく敬服しましたね私は。各班に一度ずつ参加させてもらいましたけども、三人三様の指導というか、非常に細かいディテールにおける指導の適確さというかね、それを生徒のひとたちに抵抗なく納得してもらえるようなものの言い方、それがすばらしいなあと思いましたね。1回ずつしか出られなくて残念だったけど、それはつまり出る必要がなかったということであって、慶賀の至りです（笑）。こういう形の授業が、仮にゆくゆくちゃんと単位がつくようになったら、需要はあるでしょうかね？

渡邊　需要がありすぎてもいけない気がしますが（笑）。単純に制度的な話なんですけど、今の話にもあったように、人数が少ないというかホドよい感じだったのがよかったというのはぼくもすごく感じていて、やっぱり人数が多すぎると互いの関わりが薄くなったり、濃度の差がどうしても出ちゃうんじゃないか。密度の濃いやりとりができる、ほどよい人数でやれたのがすごくよかったなと自分では思ってます。

小松　小松組はたまたま生徒が1人少なくて2人だったんですけど、2人でも大変だった（笑）。

一本　私は、人が多いとあんまり発言できないので、2人でラッキーだったかなと。

武村　単位がついて人数が倍とかになったら、こうはいかないだろうね。今回、参加者のうち半分くらいがもともと私のゼミにいる人たちでしたけども、両方に出てる人、その点比較してどうでしたか、木村さんとかは？

木村　そうですね、やっぱり差し向かいというのは、しかも喫茶店のあの狭いテーブルで膝を

つきあわせてお話していただけるのは嬉しかったですね。普段の大人数のゼミだとどうしても、例えば納得しきれない部分があっても、みなさんはわかってるんだろうって気が引けて突き詰められずにいたりとか、逆に何となく説得されてしまう部分があるので。対面だと、他の人が話を進めてくれないから自分で進めないといけない、無理にもわかったような応答を自分でしないといけないので(笑)、それが練習になって、ものすごくありがたかったです。

武村　本ゼミは今のところ院と学部と合同でやってるからね、学部のひとはゼミに入ってくるといきなり院生の中に対等に放り込まれて、なかなか思うように発言もしにくいところが問題だなとは常々思ってはいるんですけどね。人数が多すぎるし。でも逆にあんまり少人数だと、顔ぶれによっては息苦しくなる危険もあるんだろうけど。そういうことがなかったならよかったね。

木村　それどころか(笑)。もうちょっとプレッシャーがあったら私ももっと緊張して取り組んだと思うんですけども、すっかり甘えてしまって、自分の都合優先でどうしても発表も後回しにしがちだったので、そこは悪かった――といいながら、たいへん気楽でフランクでよかったです（笑)。

長田　それはそれは（笑)。受講者の方の切実さにチューターのわれわれが追いつけない、なんていう事態にならなくて良かった（笑)。

対話と内省の場として

武村　原組はどうでした？　山口さんは？

山口　私は、「授業」というよりは遊びにいくというか、サークル感覚で参加してて（笑)、原さんからのメールに何度か「ミニゼミ」って書いてあって、ゼミなのかこれ？ってずっと（笑)。

原　それはぼくが言い出したわけでは(笑)――

武村　私です（笑)。もともと私の本ゼミが、これが規模が大きくなったみたいなものだからね。原くんどうでした？

原　始める前までは実はものすごく、びくびくドキドキしていたのですが、実際にフタを開けてみたら、みなそれぞれとても活発で。

武村　活発だったよね原組！　びっくりしたよ。

原　ぼくはあまりしゃべる必要がないんじゃないかと思うくらいに、3人とも。ぼくがちょっと席を外している間にも、何やかや賑やかに話してくれていたようで、立場上ぼくが指導の人ということになってるけれども、むしろ毎回みんなに助けられながら、なんというか、とても単純に、楽しい議論の場を一緒に作ることができたのではないかと思っています。普段武村ゼミで一緒の渡邊くん、谷口くんの普段とはちょっと違った顔をちらと見ることができたようにも思えましたし、これまでまったく面識のなかった山口さんは山口さんで、「だったら、ちゃんとそういうことを書いてくれないとわかりませんよ！」というような感じでバシバシと忌憚なく突っ込んでくれて――それはもちろん好意的な形で――、横で聞いていてとても気持ちのよいものでした。それで、いま言ったように、初回からかなり活発だったのですが、回を重ねるごとに活発度はさらに増して行って、そして、これは最初からそうだったのですが、それぞれの発言も、ただ単に重箱の隅をつつくようなものではなく、そのつどの発表者の原稿をよりよいものにしようという意識が感じられるようなもので、聞いていてしばしば、はっ、とさせられていました。とてもしっかり読んできてくれているのだなと。そういう意味で、書く力だけでなく同時に読む力も身に

ついて行ったように思えます。議論が活発であったように、ほぼ毎週のように送られてくる原稿の方も、突っ込みどころというのはもちろんそれぞれあるのだけれど、それぞれたいへん魅力的で、それぞれの最終的に「言いたいこと」、「言わんとしていること」というのも、比較的初期の段階から、ぼんやりとしていながらも、おそらくしっかりあったようにも思え、ただ、そこへいたるための道路整備の手助けを――つまりたとえば、「なぜそう言えるのか」、「そのように言えるのは、それぞれが選んだ作品の具体的にはどこからなのか、どのようなところからなのか」というような突っ込みに対してテクストのなかで答えるための、あるいは、「そのように言うためには足りないもの」をやがてテクストのなかで示すための手助けを――はたしてこちらがきちんと果たすことができたのだろうか、というところが反省どころです。

武村　ひとり何回くらい発表したの？

谷口　ぼくは３回かな。

山口　私が４回。

渡邊　ぼくがあまり発表できなかったので、そのぶん。

武村　渡邊くんは本ゼミのほうでさんざんやっていたものね。

原　他の組では一度に２人発表とかやっていたみたいですけど、それだとぼくはきついかなと思って、みんなには悪いけれど毎週来てもらって１人ずつやっていました。それでも毎回、ふと時計を見てみると、３時間とか４時間とか経っていたので、１人体制にしてよかったと思っています。ぼくの突っ込みが要領を得ないから長くなっちゃったのかなーとも思いますが――

谷口　いやいや。

武村　何、いやいやって（笑）。

谷口　（笑）いやいやそんなことは。

渡邊　（笑）原さんの度量の広さがあったと思います。

武村　それは感じましたね私も。場の雰囲気をちゃんと原くんが統括していたよね。山口さんはサークル感覚ということだけども、それでしかしきっちりとものを書いてみた感想はどう？

山口　ひとつはあのう、私は夏休みの間すごく、自分が「虎になってしまう」ってずっと思っていて――

武村　虎？

渡邊　『山月記』ですね？

山口　はい。何かこう、就職活動とかで自分のことしか考えられなくなって、袋小路に入ってしまって、どうしよう虎になっちゃう！と思ってたときに、新学期が始まって、こういうものがあるって聞いて。それまで自分の書いたものを他人に見せたことがほとんどなくてMixiの日記くらいだったので、自分が書いたものをひとが読むと、あ、こういうふうに受け止められるんだってことを改めて確認したというか、他人っていうものが存在してるんだっていうこと――自分だけじゃないんだこの世界には、って、そういう感覚を受けました。もちろん自分の発表の回もそうでしたし、谷口くんや渡邊さんが書いてきてくれたときも、あ、こういうふうに考えてるんだな、自分と違うことを考えてるひとが世の中にいるんだってことを考えました。私は寺山修司のビデオレターについて書いたんですけども、寺山が亡くなった時期と、それが書かれた時期と、現在、っていう時間をすごく気にして書いていたら、渡邊さんは渡邊さんでやっぱり時間っていうことが作文のテーマだったし、谷口くんも、切り刻みの映像を繋ぎあわせたプロモーションビデオだったので、奇妙にも３人ともけっこう似たようなところに関心

を持っていて、けどだからといって全くおんなじでもなくて。お互いに密着もせず、けども影響を受けながらやりとりするのが、すごく面白かったです。忙しいときもあったので、ちゃらんぽらんに適当に書いて出してしまったときもあったんですけど、そういうときでも、みんな一生懸命読んでいろんな意見をくださった。嬉しかったのと同時に、自分がもっとちゃんとしなきゃいけないなって思いました。あと、もうひとつ思ったのは――私はずっと、最初に書いたものをちょぼちょぼ直しては持っていくっていうやりかたをしてたんですけど、あるとき谷口くんから、一回全部一から書き直したほうがいいよって言われて。そう言われたときに、自分がいったい誰に向かってこれを書いてるのか、何の目的で書いてるのか、わかんなくなっちゃったんです。それまではMixiでも何でも、文章書くときはいつもどこかに終わりがある気がしてたのに、終わりなんかなかったんだ、じゃあ何のために書いてるんだろう、書いても意味ないんじゃないかっていう気持ちに陥ってしまったんです。で、それでも自分の発表の番が来るんで、書いたら、なんか急に手紙形式に――寺山さんへのラブレターみたいなものになっちゃったんですよ。それを持ってったら、みなさん「これどうしたらいいんだろうね」みたいな感じに（笑）。ご迷惑かけて申しわけなかったって思う反面、でも自分では、そういうことを考えることができたのはすごく、よかったんじゃないかなと思いました。

武村　面白いね。突然、自分でも思ってみなかった形式で書かざるをえない瞬間が訪れたりするんですよね。それはあることだし、あっていい。何のために書くのかっていうのはそれこそ、何のためにそれを問うのかっていうような問いであるけれども、そういう疑問が手紙形式を導くというのは、私も覚えがあるからすごくよくわかるよ（笑）。それにしても、山口さんなんかものすごいフットワークの持ち主で、いろんな人とつきあって、Twitterもやって最近は（笑）、自分と違う他人が世の中にたくさんいるんだってことはいやほど知ってるはずの人だと思うんだけどね。そういうことを、でも生身で知るのと、文章書いたり読んだり読まれたりっていう関係の中で知るのとは、違う種類の体験？

山口　そうですね――ひとつには、MixiとかTwitterでレスポンスを返してくれるっていうコミュニケーションのしかただと、面と向かってではないからやっぱりけっこう割り切ってしまって、Mixiでは仲良く喋ってるけど実際会っても別にそんな親しくはつきあわないとか、使い分けをしてしまう。その手紙形式の原稿を送ったときも、メールに添付して送信したときには別に後悔してなかったんですけど、集まる日が来て、その場で、原さんがプリントアウト持ってきてくれたときには、うわあ、恥ずかしくて帰りたい！と（笑）――メール送信はボタン押すだけなんで、原稿が送信された先のことはあんまり考えてなかったと思うんですけど、紙を手にして下さってしかもそれにペンが入ってるのを見ると、あ、読んでる人がいるんだ、恥ずかしい、消えていなくなりたいって思ったんです。あと、そうですね――実際にいろんな人と会っていても、実はけっこう自分の殻におさまっちゃってるところがあって。例えばインドに旅行したとき、「インド行くと人生変わるよ」なんて言われて出かけたんですけど、結局は自分の殻に入ってて、いろんなものを見ても、あんまり本質には近づけない感じがしてた。何もかも動物園の檻を通してしか見てないんじゃないかっていうのはずーっと思ってきたことですね。それが、そうやって寺山へのラブレター

めいたものを読まれたときには、その檻はなかったかな、って。

武村　そうか。そういうことが起こる場でありえたんだね、あの場がね――谷口くんはどうですか、「サークル」の感想は。

谷口　そうですね。時折Twitterってどうなの？とかいう雑談を差し挟みつつ、基本的には真面目にレジュメについて話をするあの「サークル」っぽい空気感は、とても良かったです。もうひたすら厳しく、雑談厳禁！みたいな雰囲気だったら嫌んなってたかもしれない。個人的には、卒論をめざして本ゼミのほうでやってる『攻殻機動隊』をずっと念頭に置きつつも、別の、「ナンバーガール」のプロモーションヴィデオでやろうと思ったこと自体が、自分でまず面白いなと（笑）。対象がどう変わろうが結局、自分は同じところに行きたいんだな、『攻殻機動隊』だろうが「ナンバーガール」だろうがあるいは他のものであろうが、これは面白いなって思ったものについて突き詰めて書いてくと、結局全部同じものになるんだろうな、ということを思いました。

武村　同じもの、とは？

谷口　何というか、ずっと鏡を見ている感がありまして。鏡の種類が違うだけで、ちょっといびつな鏡だったりとかして。ちゃんとした鏡を探したい（笑）。それで、その鏡に映し出されたものをちゃんと書き留めたい。抽象的な比喩ですけど。そういうことを思うようになった、というのがこのミニゼミで自分の身に起こった一番の変化だと思いますね。

アウトプットの技術を開発する

武村　あれですよ、谷口くんにしても福島くんにしても、12月くらいになると、本ゼミのほうで発表予定をきいても「いやー、ミニゼミのほうがあるから」とかってみんな、もう完全にミニゼミ優先の体制になってたね（笑）。嬉しかったですけどねむしろ。さっきも言ったように本ゼミは人数が多すぎるので、発表の回数をそうそう重ねてもらえない。特に学部のひとはもっとみっちり回数多く発表してもらいたいのに、なかなかそうもいかなくてね、それが忸怩たるものがあって。福島くんどうでしたかミニゼミは。

福島　長田組は意外とゆっくりというか、われさきに発表したがることもなく落ちついた感じで進んで、それがすごく心地よかったです。で、ぼくの扱ったのはテレビコントだったんですけど、その話の途中でちょくちょく長田さんが、このコントのどこが面白いかを、面白さがわかってない津田さん木村さんに口で説明してっていうんで、それがすごく恥ずかしいんです（笑）。もともとそういうことがしたくて、つまり面白さがわかってもらいたくてその文章を書いてるわけなので、嬉しかったには違いないんですけど――

武村　でも恥ずかしいの？

福島　恥ずかしかったです（笑）！

武村　（笑）文章で書けば恥ずかしくないの？

福島　面白いことを説明するのって、すごい恥ずかしいじゃないですか、書いてるときはその恥ずかしさを隠せるんですけど、口頭で直接言わないといけないのは、恥ずかしいなあーって思いました（笑）。

武村　（笑）どうですか長田くんそのへんは、口頭で説明してもらうというのはどういう意図で？

長田　えー、素材がコントなので、面白いものだというか、面白いことを目指してるものなんですけど、コントが笑えるのと、それに

ついて書いた文章が面白いのは全然別のことですから。文章にするとコントの面白さがなくなるというのを福島君が気にしてたんですが、まずそれがなぜ文章で失われるのか、つまりその面白さって何なのか、ということを考えるのは重要だと思いましたし、テレビコントという映像の特性とか、お笑い芸人が演じ手であることの特性まで射程に入る福島君の興味は随分面白い論考に繋がりそうで、そういう面白さをこそ目指して書いてるのだろうから、その２つの面白さの違いや関係がクリアになるといいなと思ったんです。その結果、かどうかは分からないですけど、回を追うごとに着々、興味の方向が鮮明に文章に現れるようになってきていると思います。

武村　長田組は実際、粛々としたムードでなかなか素敵でしたが、津田さんはどうでしたか、感想は？

津田　あの、作文講座はずっと緊張してたんですけど――

長田　え、そうなの？　言われてみればそう見えたこともあったかな（笑）。

津田　緊張してました実は（笑）。よかったのは、ひとつは、映像を見るときに、どういう見方をすればいいかとか、どれくらいのレベルまで掘り下げて見ればいいのかっていうことを、長田さんにいろいろ指導してもらう中でちょっとづつ気づかされていったといいますか――自分が選んだ映像も、最初はただ「気になる」くらいのレベルだったんですけど、見方がだんだんわかってくるにつれて、だんだん本当に好きになっていって、面白いなって思えてきたのがよかったなと思います。

武村　そうか、それはほんとによかったね。ぎりぎり見て考えて書いてってやってると、大好きだった作品が下手すると返って嫌いになっちゃうことが時々あるんだよね。好きになれたのはよかったね。途中で嫌いになったりしなかった？

津田　それはなかったです。最初が別に嫌いでも好きでもないくらいで、しかもそれが何なのかってことがあんまりよくわかってなかったので。見てく中で、こうなのかもしれないっていうのがだんだんわかっていくことで、好きになっていった感じです。

武村　どこまで掘り下げて見るかってことと関係があるんだね。ちょうどいい掘り下げかたをみつけた？

津田　そうですね。あと――さっきのお話にもありましたけど、自分が例えば社会学部のゼミで論文を書いたりするときに、言葉の使い方がすごくいい加減だったなって思って。見たものに対して、それを文字にするっていうことをするときに、ちゃんと、見たものをそのまま正確に、自分が見たように書くためには、言葉の使いかたひとつひとつに気を使わなきゃいけなかったなと改めて感じました。それはもちろん社会学部の論文だってそうでなきゃいけないんですけど、つまり、そういうことに気づかされたなと思います。

長田　なんというか、みんな、見ていてまぶしかったですね。適切な見方とか掘り下げ方というのも――視聴ってのが掘り下げるものなのかどうかはともかく――対象ごとに探ることになると思うので、ぼくとしては、正しいものを教えたというよりはそれを探る方法を一緒に考えた、何か教えたんだとしてもいいところそのための手持ちのスキルを教えた、というところだと思うんですが。でも常々、インプットばかり――人名や他人の主張の知識を蓄えるようなことばかりしていても、それだけだと部屋の本棚と頭の中に成金趣味のゴミ屋敷みたいな

ものができていくだけになりかねないんじゃないかと思ってはいるんです。ろくにアウトプットもしなかったり、ろくでもないアウトプット——横流ししたり連想ゲームレベルで無理矢理つなぎ合わせるような——ばかりしていたらゴミだと言えてしまいかねない、ということですけど。それらがゴミでなくなるのは、ゴミでないちゃんとしたアウトプットに過不足なく必要なかたちで組み込まれて提示された時だろうと思うんです。ぼくが教えたりできるのは、だからそのアウトプットにおける手持ちの技術や、あるいは各自に必要な技術の模索法だけしかない。その都度なにかインプットが必要になったとしても、ぼくが提供できることはあまりない。アウトプットの技術というのも、それぞれの論考で何を成したいのかという核から要請されるものでないと、単に作法に則るだけじゃ意味がなくて、だからほとんど毎回核を確かめて必然性や有効性を問い返しながら開発する、あるいは開発しなおすようなものですよね、ぼくがしたのはその手伝いだけです。でも、福島くんも津田さんも木村さんも——発表のサイクルが早かったから出てくる文章も短かったので少しずつなんですけど——ぼくから見て着実に文章が良くなってきた。例えば最初のうちは、日常生活寄りの、すぐなんとなく伝わってしまうだけに確かなところはあんまりひとに伝わらない感覚的な言葉とか、あるいは一見すごく重要なことが言えてる感じはしてもその実怪しい難解な用語とかがときどき使われていて、そのせいでうまく語れていないようなところがあったのが、だんだんと各自にふさわしい適切な、いい言葉を見つけられるようになってきた。それが、見ていてまぶしかったです、とても。

津田　ほんとですか。それはよかったです。そんなに成長してなかったのかなと思ってたんですけど自分では、それはよかったです、意味があったんだなー。

長田　そう言ってもらえるとぼくも嬉しいです、ぼくにも意味があったんだなとよりいっそう思える。

書くことと読むこと

武村　渡邊くんは11月から1月にかけて、ちょうどミニゼミにかぶる期間に本ゼミで3回も長いものを発表してくれて、しかも卒論で、大車輪でしたよね。

渡邊　申しわけない限りです！

武村　何がよ（笑）。おかげでみんな安部公房の『密会』の面白さを、『密会』自体を読まなくても十全に知ることができたわけですよ（笑）？

渡邊　ミニゼミであまり発表できなかったのが心残りではあるんですが。ミニゼミは、一応作文講座という題目になってるんですけど、ぼくにとっては作文ゼミというよりはむしろ読書ゼミというところがありました。いかに書くかという問題もですけど、それよりむしろ、いかに読むかっていうのがぼくにとって大きな問題なので、そういう練習ができたのがとてもよかった。本ゼミとミニゼミはぼくにとって途中からそういう棲み分けになってたのかなと思います。それに、普通、ゼミナールというものは基本的に輪読だったりして、何かを読んで発表するという形が多いと思うんですけど、そういう形の普通のゼミよりも、なぜかはるかに読書ゼミだった——作文ゼミという形であることによってはるかに読書ゼミになる、とはどういうことだろう。それがひとつ非常に興味深かったです。

武村　本ゼミのほうでも同じように書いたり読

んだりするわけだけど、やっぱり人数と密度の問題でしょうかね。はるかに濃密に読まされた感じですか？

渡邊　それもありますし、テンポがよかったというか、ほどよいサイズのものがほどよい間隔で投下された（笑）。

武村　なるほど（笑）。朴さんなんかはどうですか、そのへん。

朴　私は、武村ゼミの形式そのものが、一橋に来てはじめて接する形式だったんです。専門が古典なんですけども、学芸大にいたときは、だいたい 20 ページくらいの作品をみんなで分担して読んでレジュメを書いていく。2 時間のゼミの時間のうち、最初の 30 分はみんなでテクストの読み合わせをして、続く 1 時間、担当者がひとりでずっと註釈をつけていって、残りの 30 分で考察を述べて、みなさんの意見を聞いて、それで終わる、という形でずっとやってきたんですね。それが一橋へ来て武村ゼミに入ったら全然違う。ある人がある作品について発表するというときに、そのもとの作品、もとの材料を一緒に読むということをしない。それが最初ちょっと馴れなくて。前もってレジュメを渡されて、でも、そのもとの作品を知らないで、知れとも言われないでレジュメだけをいきなり読むっていうのがすごく難しくて、それでも初めのうちは頑張って読もうとして、もとの作品についても自分でなるべく調べてからゼミに臨んだりしてたんですけど、だんだん、もういいや、どうせわからないから読まないで行こうみたいな、レジュメすらただの義務感で読んでいくような感じになってたんです実は。

武村　あ、そうだったの（笑）？　でも確かにそれはうちのゼミの一番ハードコアというか過激な点で、そこが、みんながゼミに居つくかどうかの試金石になってるようなところがあるからね。

朴　でも、それでもゼミに出て議論を聞いて、その中で、今回チューターをしてくださったお三方がいろんなご指摘をなさるのを聞いていると、お三方だって私と同じようにもとの対象作品を読んだり見たりなさってはいないはずなのに、なんでああいうふうにできるのかなっていうのがとてもとても不思議で――最初はただ不思議で、でもそれがだんだん憧れになっていきました。ああいうふうに、ああいう指摘ができる目を私も持ちたいと思うようになったんです。このミニゼミのガイダンスに私は少し遅れて行ったので、詳しい内容を聞き損ねて、ただ、このお三方が一緒に何かやってくれるらしいっていうそこだけ聞いて、それだけで入った（笑）。とにかくこの講座入ったら、お三方のような目が持てるようになるのかな――何かひとつの文章を最初から最後まで新しく書く間、ずっと見てくださる、そういう時間が持てるんだっていう、それはもう私にとっては、これは絶対行かなきゃ、というくらいのものでした。

武村　そりゃまたすごいね！　チューター冥利につきますよねお三方。

小松　言葉もない（笑）……

朴　映像についてはぜんぜん知らなくて、でも知らないところでも書いてみたいなという思いもあって、最初は映像ものを対象にして書いたんですけど、結局テーマが 3 回かわって、最終的には博論につながるところに、古典に戻ってしまったんですけれども、映像であれ何であれ分野は違っても、最終的に、書く、っていうところになれば同じなのかなって思えてきて。私は自分でも笑いについて興味を持っていましたけど、一本さんのテーマがやっぱり笑いに関することで、それはテレビの現代のものだけれども、発表をきいていると、私の関心と一本さ

んの関心が別のものではなくてどこかでつながるんだなって思えてもきました。すごく欲張ったんです、この３ヶ月の間――あれもこれも、いろんなものを吸収したいなって。ご指導のしかたとかも、ああ、こういうふうに指摘すればこういうふうなアドヴァイスをあげられるんだなとか、すごく、いろんな形で勉強になって、充実しました、本当に。

武村　いや私も、言葉もない（笑）。すごいです。

小松　……朴さんの古典分野に関しては、私は専門知識がないので、何のアドヴァイスもできないのが辛かったんですけどもね。ゼミで出る大抵の文章は、もとの対象について知らなくっても文章そのものとして読んで何か言うことができる、でも朴さんのとかは、いわゆる真正の学術的テクストで、ちょっと毛色が違うんですよね。ある特定の学術分野において定められてる規範というか、そういうものにきちんとのっとって書かれている。そういう規範なしにフリースタイルで書かれた文章を読むというのは、それはそれで読みの難しさがあるけれど、規範のあるテクストを読む難しさは当然ながら別種のもので、たとえば私自身、武村ゼミではどれだけ発言していても、朴さんの学芸大のゼミに行ったらたぶん何ひとつ発言できなくなってしまう、そういう違いがどうしてもありますよね。でも、そういう違いがある中でも、ものを書くっていう点で共通するものがあるんだと朴さんは捉えてくださって、本ゼミにもこちらにも来てくださって、それがとてもありがたいと思うんです。私は自分でも研究者みたいなものになりたいと思っているにもかかわらず学術論文が書けなくって、それどころか、学術論文みたいなものに関してもはや嫌悪感といわずとも、ある程度の不信感すらあるような、そういう立場だったりするにも関らず、学術的なフィールドでやっている人が、根っこの部分の問題は同じなんだと考えてくれる、そういう人がいてくれるというのは、ものすごく勇気づけられることなんですよ。それは個人的な話ですけど――

武村　そうね、小松さんが言ってくれたことは隅々まで同感で、朴さんみたいなひとが喰らいついてくれることがどんなに励みになるかということもそうですけども、学術的な論文、特に国文系のものってのは、それに対してどういう助言なり突っ込みなりをしたらいいのか、たいへん難しいね。本ゼミの方でも国文系の人たちの発表の回というのは特殊で、他の回とは趣きが違う。私だって学芸の専門ゼミに行けば、隅のほうにちっちゃくなって、ちょろっと何か質問したりするのが関の山ということになるわけで（笑）、難しいのはつまり、ゼミがいかに大人数でも、そういう回は下手するとその人と私のマンツーマンに近いことになっちゃったりしますよね、さっきの差し向かいの対話というのとは別の、どっちかといえば鎖された意味でのね。つまり、例えば『攻殻機動隊』の発表のときは、みんなが思い思いの形で突っ込んで、その対象について何も知らない人でも、２時間とか３時間の議論の間には何らかのものを共有していくことができるんだよね。でも専門的な国文系の話、あるいは国文でなくとも、カッチリした学術フィールドを基盤にした発表の回は、サシの対話が成り立っても、そこで何が面白いのかとか、何が問題になってるのかとか、限られた時間の中でゼミ全体に共有させるように話を回していくことがつまり非常に難しい。

渡邊　……たいへんアタマの痛い話だなと思います。

武村　何が？　なんで？

渡邊　ちょっとこないだの試験のことを……

武村　ああ（笑）、言社の修士入試面接でね。学術論文とは、研究の作法とは、っていう話をさんざん説き聞かされたんだったね。でもそれは審査員のひとが、むしろ渡邊くんを高く買ったればこそなんだから――その面接の話題で、客観性とは何かっていうのがあってね。専門的な分野では、こういうふうにして客観性を付与するっていう規則、定型が何かしらちゃんとあるものだし、大抵は、何らかの資料にあたるっていう形で客観性が保証されるのが常だけど、でも例えば松本人志だの、ましてや『クイズ・ヘキサゴン』だの『ラリベロッチ』だの寺山のビデオレターだのをどうにかしようっていうような場合は、資料に当たるといったって信頼すべき「既存の研究文献」なんて、仮に幾つかあったところで自分のしたいアプローチとはぜんぜん関係がなかったりすることが大半で、客観性を付与してくれる資料といえば、作品の製作過程に関する外部資料しかない状況が普通。ならば客観性を自分の書き物のなかにどうやって加えるか、そのときに依拠できるものは結局、自分が相手にしている当のもの自体、と、それに対して自分が書くテクスト自体、しかないわけですよね。自分が書いて人に読ませるテクスト、それを構成してる言語、その言語というもの自体があらかじめもっている客観性というか、それを使用する人間どうしならば最低限必ず共有しているであろうところの根本的規範というかね、そういう意味での言語自体の客観性に依拠するしかないわけです。どういうふうに書けばきちんとした言葉になるかというところをぎりぎり詰めるしかない。それをやっていけば、一見どんな主観的なことを書いてるようでも、ある時点で客観性に到達する、それは学術論文に限りなく肉薄する――イコールだとは言わないにしても――と私は思うんですけどね。

何の役に立ちますか？

武村　まあでも、将来モノ書いて暮らそうってわけでもない人にとって、こういうことが何の役に立つのか、よくわからんですけどね。役に立つとすればどういうふうに立つんだろうね？

朴　こういう訓練をつんでいくと、正しいとか正しくないとかとは別のところで、たぶん今まで自分が見たり読んだりしていたものとは違ったものが見えてくる、そうすると、たぶんもっともっと豊かになっていくんじゃないかな――たぶん、うまく言えないですけども。

武村　津田さんなんかどう。就職、みずほ銀行でしたっけ。就職した後で、何か役に立つかね今回の練習が？

津田　んー、役に立たないことはないと思います（笑）。

武村　何かにはなる（笑）？

津田　どうなんでしょうね（笑）。でも、さっきあらかじめ構成したほうがって言いましたけど、でも書きながらいろんなものが見えてくるっていうのは確かにあって、映像見てるときでも、書いてたら、あ、そういうことなのかもしれないってわかってきたりってことがあるので、何か――考えなきゃいけないことがあるときは、書いて文章にしながら考えるというやりかたを使ってみてもいいかもしれないな、とは思います。具体的にどういう場面になるかはわからないですけど。

小松　自分が言葉を使うときに、少しでも言葉の使い方に意識的になって暮らしていける機会になるというだけで充分なのかな、と思うこともあるんですけどね……。っていうのも、これは本ゼミのほうですけど、武村ゼミのやり方が何の役に立ったかって、就職活動に役に立ちま

したっていう意外なことを言ってた人がいたので（笑）。その人によれば就職活動というのは自分のことをみつめなきゃいけない機会で、自分はどうしたいこうしたい、こんなこと考えてますみたいなことをエントリーシートや何かに書かなきゃならないから、そこで、自分の考えを言語化する行為、その言語化の仕方についてかなり自覚できるようになったことがよかった、と言うんで、なるほどなあ、と（笑）。

木村　でも確かにそうなんですよね、就活って、あなた自身は何がしたいのとかって訊かれたときに、誤魔化すのは簡単、でも本当のところを説明するのがどんだけめんどくさいか、つまりは自分が普段どんだけ何も考えてないか――それは卒論とか書けばその過程で否応なく突きつけられはするんですけど、こういう機会にちまちま馴らしていってもらうというのは、けっこう、大学でしかできないことじゃないかなと思います。

小松　そういう形で活かしていけるなら、それもいいかもしれない。

渡邊　……ぼくそれ絶対無理ですね！　どんなに書いても無理だと思いますね！

武村　まあまあ（笑）。

渡邊　自分はどんどん反対の方向へ行きそうで怖いですけどね。わかんないですけど。

武村　逆の方向って？

渡邊　まあなんか、変な方向行くんじゃないかとか。

武村　どんな方向だろうね（笑）？　そういえばその、就活に役に立ちましたって言った人が本ゼミの最後の回に、遺書みたいにしてみんなに振った質問が、「みなさんは今後どうやって生きていくつもりですか？」（笑）

山口　ひどい（笑）！

渡邊　アタマがいたいですね……

武村　いたいですよね（笑）。みんながいろいろ答えた中でいちばんスガスガしかったのが「結婚したい」。

山口　すてき☆

武村　日本人はみんな、何だかんだ答えるんだよ。でも朴さんとウィンさんは口をそろえて、別にどう生きてくとかはない、このままでいい、っていう。かっこよかったですけどね。

朴　いろいろ悩んで悩んで、模索して模索して、こういうふうに生きていきたいっていうのはそれはいろいろあったけど、でもそういうふうにはならないっていうのがわかってきてるので、単純に。

渡邊　ぼくは、今のままではたぶん餓死するだけなので、餓死しなければ別にいいんだろうなって内心思いつつ――どう生きていけばってのもあれなんですけど、なぜ書くのかって問いにしても――書くにしろ生きるにしろ　結局、別に何か選択された結果というものでもないだろうと思ったりするので、そういう問いはヤボったいというか、どうにも、うまく答える気になれないというか。

武村　まあね。書くのでも読むのでも――昔、わたくしごとで恐縮だけれども、息子がまだ5歳とかそのくらいのときに、私が放り出しといたエックハルトの『神の慰めの書』かなんかの日本語訳の文庫本を開いて、読んでるかのようなふうをしてるから、「そんな難しいの、よんでるの？」ってきいたら、「うん。ここに字がかいてあるからね。だから、よむんだよ」って言ってた。なんか、ぞっとするよね人間（笑）、フマニスムのカルマですかね……それはともかく、この講義＝演習連結授業の試みは今後も何らかの形で継続していく予定なんですけども、来年度も仮にやるとして、どういうふうに宣伝したらいいかっていう問題があるんですよね。

今年は単位つけなかったから時間割に載せられなくて、ポスターを貼るというたいへん古典的なことをやったんだけどあんまり効かなかったみたい（笑）。そういう具体的な宣伝メディアの問題もあるけど、それ以前に、ターゲットの設定というか。

小松　私としては、例えば学術的な論文を今後書いていきたいと思っている人とか、自分が書くということについて――自分が何について何をどのように書いているのか、その記述の仕方が問題になるんだという自覚があって、その上でどう書いたらいいのか悩んでいるような人が来てくれたらいいと思うんですけど、ただし、学部のうちにそういう問題意識を持てる人がどれだけいるかな……。私はたまたま学部のときから武村ゼミに来ていたから、そういう問題意識を持つに至って大学院に入院してしまったんですけど――

武村　すみません！　やっぱカルマだね……

小松　（笑）そういうところにつかまっちゃうことがなければ、そういう問題意識はたぶん私自身持たなかったと思うし、普通なかなか持ちにくいと思うんです。でも、もとから持ってはいなくても、来てくれればそういう問題意識をすごく切実なものとして、自分は実はそういうものを持ってたんだって気づく人たちはたぶんけっこういる。そこへ、どういうふうに訴えかけて来てもらえばいいのかは、難しいな。少なくとも、映像に興味ある人は来てみてくださいみたいな誘い方はたぶん違いますよね。

武村　ですよね。映像文化論と連動させたのは、TAをやれるのが当面あなたたち3人だけだったからなんだけど。いずれにせよ来年度はこういう形の予算はつかないので、今度は講義と教養ゼミをリンクさせようかなとちょっと考えてる。1、2年生向けの自由選択ゼミね。つまり、講義の単位ほしい人は必ず教養ゼミを並行登録して、ゼミのほうをクリアしたら講義の単位も上げますという――のは、どうか（笑）?!

谷口　そうするとつまり、クリアすると4単位くるんですよね。

武村　そう。

木村　あ、ずるい、それ。

武村　自分はゼロだったのにって？

木村　うらやましいなー（笑）。

谷口　とりあえず登録するって人は多いでしょうね。

小松　多ければ多いほど、初回ガイダンスのときに、この作文教室でやることがどんだけ厳しいかを滔々と語ってなるべく諦めさせたい（笑）。

谷口　それで振り落とされて残った人はすごくちょうどいいんじゃないですか？

小松　それで何人くらい残れるか、けっこう少なさそう。でも多かったら返って困りますよね。

山口　でも教養ゼミだと1、2年生しか登録できないですよね。

津田　あ、4年生はだめ？　それはちょっとヤだ――

武村　嫌か（笑）。

谷口　はじめのうちやっとくっていうのはすごくいいことと思いますけど。

武村　今年4年生ばかりだったからね。

小松　大学入ったばかりの1、2年生にはちょっと大変かも。

武村　そうかな。

谷口　早い遅いは別にないんじゃないですかね。

武村　教養ゼミで昔「作文ゼミ」をやってたことがあるんですよ。それは映像とは関係なく、TAもなく、何かモノ考えて書きたいひと練習しようよっていう単純なゼミだったんですけど、20人近くいてみんなで文字通り回し読みさせたりね。それでハマって大学院まで来た人が

いる（笑）。だから１、２年でも大丈夫かもね。確かにあまり長いものは書かせられないけど、練習のしかたによっては面白いですよ。フレッシュですよ。どう、みなさんは、例えば年下の友達とか弟とか妹とかが一橋大学に入学するとして、そこでこういう授業があったら、受講を勧めますか、それとも、なるべく誘ってやりたくない感じ（笑）？　津田さんなんかどう、ひとに勧める？

津田　はい、それは、すすめます。

武村　（笑）なんていって勧めるの？

津田　私はむしろこういう授業が増えていってほしいです。講義聞いてるだけだったら、聞いたことを自分でどうやって使っていこうっていうことにはなかなかならないし、聞いてレポート出して終わりになっちゃうと思う。こういうゼミ形式で自分が書いたり作ったりしたものを見てもらえる機会があったほうが。今回は講義のほうを自分で生かせるところまでは行かなかったですけど。さっき長田さんがアウトプットってお話をなさいましたけど、そういう、聞くのとアウトプットするのとが分れていて両方の機会があるほうが身につくし、自分で書いてみてはじめて授業で聞いたことの意味がわかるということもあると思うので、こういう授業の形式はすごくいいなって思いました。

武村　一本さんはどう？

一本　うーん、私自身の問題関心にはすごくぴったりだったので、私自身は誘ってもらいたいなと思うんですけど、私みたいな考え方をする人は回りにはあんまりいないので、たぶん誘わない（笑）。

武村　どんな考え方？

一本　例えば――これは人に言われた喩えなんですけど、みんなは、ああ今日もお天気がいいなあルンルンって生きてるのに、私はそこで「なんでなんだ」って考えちゃう、そこがヘンなんだよって。

武村　ヘンな人を個別に釣るのがいいのか（笑）。

山口　スカウト制。謎の組織だ（笑）。

今後の展望

武村　私自身の反省点は、第一には、講義とは結局ほとんど連動しなかったという点で（笑）。講義の付属講座というよりはむしろ、私のゼミの派生ゼミみたいな感じになってしまったので、それはそれでよかったと思うけれども、本来の趣旨とは少々違ったかもしれない。チューターのみなさんには一応、毎週講義原稿をお送りしてたんですけどもね、今週はこういうことをやりましたという。けど作文練習そのものは、講義の進行とはおかまいなしに進んでいたね。もっとも、チューターの３人がもともと私の「映像文化論」の要諦は摑み済みだから、それで一向に構わなかったんですけれども。ゆくゆくはもっとちゃんと連動させる方法を模索するべきところだろうと思います。それはひとまず私が考えるべきことですけども、ミニゼミ自体における修練の形式に関して、みなさんからのご提案等があればぜひ伺いたい、今回こういう点はまずかったとか。いっつも「シュベール」でコーヒー１杯で何時間も粘ってってのどうなのよとか（笑）。

長田　今回のやりかたは今回でよかったと思うんですけどもね。いろんな事情で、３ヶ月のプロセスにあまり劇的なメリハリはつかなかった。毎回ほぼ同じくらいの分量を書き加えてそれについて考えてっていうのを繰り返していたんですけど、そうではなくて例えば最初に大枠を、素朴に気になるところから一番訴えたいことま

で全部、繋がらなくてもいいから話してみて、そのあと１ヶ月くらいの長めの期間をあけて全面改稿覚悟で最後あたりまで書いてみる、それをもとに何度か話をしながら書き直していくとか、そういうふうに段階を分けてみてもいいかなと思いました。どうなんだろうな、人によって向き不向きもあると思うんですけど。どうですか津田さんは？

津田　あ、そうですね、はい、そういう書き方のほうがいいかな、私は。今回ずっとゴールが見えない形で書いていて、最近になってやっと、こういう構成で最後まで行こうかなっていうのが見えてきたので。最初に一応構成を考えてゴールを決めておいて書くっていうやりかたのほうが。どういうところに集中して見て、どういう方向で書いてみるというのが最初にしっかり摑めてるほうが進めやすかったかな――構成自体が途中で変わることはあると思うんですけど、仮にであっても先に考えてから書いたほうがよかったかなと思いました。

武村　木村さんは？

木村　私は逆に、最初はとりあえず枚数少なくていい――つまり完成作でなくていいから、とりあえず何か書いてみろっていうところから始められるのがすごくありがたかったです。あらかじめ構成を最初から最後まで考えて書き始めたほうがいいというのは、それもよくわかるんですけど、私自身はたぶん、構成を考えてこいと言われたらそこで止まってしまうので。何か書いてこいといわれて、書くことで考えていくことができたのはむしろありがたかった。

武村　そうか、人によるんだねやっぱり。両方のやりかたをオプションで選べるといいんだろうねきっと。

原　３ヶ月という期間はどうだったでしょうか、長かったのか短かったのか、あるいは、ちょうどよかったのか。僕自身はかなり急ぎ足だったように感じているのですが、もしかすると前期にやったほうがゆっくりやっていけるのかなとも思いました。後期はみななにかと――特に４年生は――慌ただしい時期だと思うので、半期でも、前期に開いた方が参加者の都合がつきやすいというのはあるかもしれません。

渡邊　それはぼくも思いました。やっぱり急ぎ足というか、短いというか、そのへんはちょっともったいなかった気はしますね。

福島　ぼくは１回原稿落としてしまったんですけども、それは期間が短かったからというよりは単にまとまらなかったからなので、期間的にはちょうどよかった――とは思うんですけど――そうですね、もうちょい長かったらもっとよかったかな、とも思うんで、通年でやってもいいかもしれません。

津田　私も半年はちょっと短かったなっていう感じがして、夏学期だったら、そのまま延ばすこともできるのかな……

武村　のばすのか（笑）！

津田　のばすっていうか、卒論とかないときにゆっくりやれたりするのかなって。

原　けっこうな駆け足の中で、多少遅れることはあったものの、みな基本的には締め切りを守って原稿を提出してくれたことには、頭が下がります。僕はかなり遅筆な方だと自覚しているので、２週間３週間のスパンで何か書いて提出しろと言われたら、はたしてみなのようにきちんとできていただろうかと。

谷口　ぼくは、３ヶ月でちょうどよかったです。２月までには何かしら形にしなきゃいけないという、期限がはっきりしてたので。発表のスパンが短かったのは辛くもありましたけど、その分その１つの対象にどっぷりのめり込めた。期間はどっちかというと短いほうが、見通しが

立てやすいというか、嫌でも立てなきゃいけないところがよかったですね。

木村　実は私は藤野先生のところでも夏学期に受講していて、そっちで同じことを思いました――といっても、あんまり出なかったんでそういう私が言うのは何ですが（笑）、藤野先生のところではレポートを段階ふんで作成していくという形だったこともあって、そういうわかりやすい目標がしかも近々にあるのは目途がつきやすくていいなと。どうしても何がしか書かなきゃいけないっていう切迫感が出るので。通年で冬に仕上げればいいってことになると夏はサボって何もしないっていうことが大いにありうる（笑）。もっとも、例えば別単位で別の授業としてでも、とりたければ継続してとってもいいというような形であれば。夏が終わって不満が残るようであれば、冬も続けられたら嬉しいんじゃないか、と。

武村　そうね……そういう手もあるかな。それに確かに半期でも夏、4ヶ月連続でやれれば冬よりは慌しくないかもね。一本さんはどう思う？

一本　短いと思います。他の人だったら3ヶ月でいいのかどうかよくわかんないですけど、私は、こんな世界があるんだったらもう永遠にやっていたいと思います。

朴　私も思います。

武村　（笑）あぶない人たちだ。

一本　（笑）だから、よくわからない。

武村　もう就職やめてここへ来な。

渡邊　そういうこと言っちゃダメです！

武村　わかってるよ（笑）。もう就職決まってて入試も終わってるし、来る気遣いはないから言うんだよ（笑）。

一本　言社研に来たいなって何度か言ったりしたんですけど、でも小松さんも朴さんもぜんぜん勧めてくださらない（笑）。

小松　それは、だって（笑）。こんなことばっかりやってるのが精神的に健康なのかどうか保証できないから（笑）。

武村　就職先でマズくなったらおいで。待ってるからね（笑）。

木村　武村ゼミを受講するようになってから、特に新書やなんか読むときに自分で脳内でケチつけるようになっちゃって、やだなー（笑）、ここ意味わかんないんだけど、とか、この言葉の意味が曖昧で言いたいことサッパリわかんないんだけどアンタどうしたいの、とか突っ込むようになっちゃって最近。

武村　（笑）何事も娯楽として受容できなくなるんだよね、長くやってると。半年でちょうどいいかもしれない。

木村　こういうケチのつけかたを、というか、理解をひっくり返す苦しみみたいなものを、もっとみんな味わえばいい（笑）。

武村　（笑）木村さんって案外性格悪いひとだったんだね。

木村　（笑）わりといじけた人間なので。みんなもうちょっと苦労すればいいというか。レポートが書けるようになるヨとかいって誘っておいて、あれッちょっと違うじゃんっていうのを、もっとやってみたい、せっかくなので。

武村　（笑）じゃああと2年くらいしたら木村さんもチューターの側にまわって、こういうフレッシュな人たちを騙して連れ込んでビシビシしごくといいよ。結局言社に来ちゃうわけだよね4月から。いいの？　卒論撤回して1年自宅で家事手伝いしながら就活に邁進とか考えなくていいわけ？

木村　それも考えたほうがいいだろうなーとは思ってはいるんですが（笑）。大学院で何か書くにはまだずいぶん力不足だなってことはつくづく思っているんで。

武村　どのへんが力不足なんですか。大学院ってものを書くところなんでしょうかね？

木村　書き物を発表する場であるかどうかはともかく、私自身はさっき話したように、結局はものを書きながら考えるらしいっていうことがようやくわかってきたので。なら、それこそ日記やってりゃいいのかもしれませんが、何がしかもうちょっとちゃんと、他の人にも通じるところを書かざるをえないだろうと。となれば、そういうことをああでもないこうでもないと試行錯誤することをわりと許されるのは、大学院という場ではないだろうかと思うんです。もちろん、勉強するところでもあるだろうし知識を得る場でもあるんでしょうけども。

武村　そりゃね（笑）。何にせよ何か書くためには何かと勉強しなくちゃならなくて、それは書いていれば必然的に自ずから要求されるから、何をどう書くのかってことと何を学ぶのかってことは常にリンクせざるをえませんよね。それは学部でも同じことだろうけど、そういう営みを専らにすることが許される、あるいは要求される場のひとつが大学院だということはあるだろうね。そうしてひょっとしたら「何かヘンな方向へ行っちゃう」ことこそが、そこでは期待されるべきだったりするのかもしれない――まあ、でもそれはもう、またぜんぜん別の問題になるだろうね。じゃあみなさん、どうしようか、完成したみなさんの作文をまとめて冊子にしましょうか？

谷口　読んでみたいですね、みんなのを。

武村　班が違う人のは読んでないものね。

小松　でもそういう予算はないんでしょう？

武村　単位もなかったんだから、お詫びにそのくらいは。

小松　基本みんなで手作業で作るっていうのはどうですか？

谷口　いいですね。

小松　中綴じホッチキスというリッパなものを持ってますので（笑）。

武村　（笑）そんなのでよければ。記念に。

一本　あんまり大したものは書けないんで、そんなりっぱな装禎にしていただかなくても。でもみなさんのを読みたいです。

武村　私も読みたい（笑）。

（2010 年 2 月吉日、武村研究室にて）

長田祥一（おさだ・しょういち）
言語社会研究科博士後期課程 3 年
専門分野：アニメ映像論
論考「汗と涙の存在論――アニメ『蟲師』の透過光」（『汎用サーチライト』第 4 号、2008）

小松祐美（こまつ・ゆみ）
言語社会研究科博士後期課程 3 年
専門分野：アニメ表現論的作品論
論考「『妄想代理人』の妄想性の顛末」（『汎用サーチライト』第 5 号、2008）

原友昭（はら・ともあき）
言語社会研究科博士後期課程 3 年
専門分野：マイスター・エックハルト「ドイツ語説教」と声について
論考「光賢間愚闇」（文藝誌『薔薇窗』20 号、2009）

（たけむら・ともこ／文学）